

平成22年 5月 6日現在

研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2006～2009
 課題番号：18611003
 研究課題名（和文） 聴覚障害学生のリテラシーを高める教育プログラムの開発
 研究課題名（英文） The Development of Educational Programs to Improve
 the Literacy of Hearing Impaired Students
 研究代表者
 細谷 美代子 (HOSOYA MIYOKO)
 筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・教授
 研究者番号：30282370

研究成果の概要（和文）： 高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生は情報保障支援とリテラシー向上支援とを必要としている。後者に関する先行研究の蓄積はまだない。本研究は聴覚障害学生のリテラシー向上プログラムを開発することによって彼らに大学教育の質を保証することを目指した。4年間に8件の短期教育プログラムを試行し、分析した。文字情報に親しむ環境を整え、自由度の高い課題を学生に提供することが学生の意欲をより高め、リテラシー向上へつながることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）： Hearing-impaired students at institutions of higher education require greater support to advance their literacy skills and to assure their access to information. Research into the development of literacy among the hearing-impaired is lacking or insufficient at best.

This research explores the development of programs to improve literacy among hearing-impaired students in higher education with the aim to assure the quality of university education. We analyzed eight short trial education programs over a four-year period. We established an environment where students were provided free access to a wide variety of topics to facilitate a familiarity with printed information. The results demonstrate a distinct increase in students' motivation leading to improved literacy.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総計	3,100,000	660,000	3,760,000

研究分野：表現教育、初年次教育

科研費の分科・細目：大学改革・評価

キーワード：聴覚障害学生、リテラシー、日本語力、大学教育の質

1. 研究開始当初の背景

後期中等教育修了者の二人に一人が高等教育に進む時代に、聴覚障害者の高等教育進学率はようやく十数パーセントであった。進学率自体は将来的な上昇が見込まれたものの、入学を果たした学生は二つの重大な課題に直面していた。大学教育における言語情報保障の絶対的な不足と本人の聴覚障害から派生する日本語力の不足、あるいはアンバランスな日本語力という問題である。入学受け入れ段階での差別や拒否ということはなく、なってもこの二つの問題は研究開始当初なお大きな課題であった。

大学入学後の教育の質を聴覚障害学生への情報保障とリテラシー育成の双方から精査すべき時期を迎えていたのである。このうち前者は教育工学、福祉工学領域の研究がかねてより進められていたが、高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生の言語力伸張、リテラシー育成という研究課題は未開拓であった。

2. 研究の目的

研究開始前年に公布された「文字・活字文化振興法」(2005年7月29日公布)は基本理念として「身体的な条件その他の要因にかかわらず、等しく豊かな文字・活字文化の恵沢を享受できる環境を整備することを旨と」するとしている。本研究課題を含む研究の最終目標は、高等教育機関に学ぶ聴覚障害学生に対してこの「文字・活字文化振興法」の基本理念を具現化し、それによって彼らに大学教育の質を保証することである。本研究課題はこの長期的構想における基礎的研究として次の2点を研究目的とした。

- (1) 字幕による情報保障を活用できる漢字・漢語力の見きわめと育成プランの開発
- (2) 活字文化を享受し、情報源として活用できる読書力育成プランの開発

3. 研究の方法

(1) 漢字・漢語力・語彙力の見きわめのために2006-2009年度の研究期間中、毎年度当初に新入生を対象として総合的読解力調査と語彙力調査を行った。また、2007年度は語彙力増強の自己点検プランを実施した。

(2) 読書力、思考力、作文力の向上を目的として多読とレポート作成課題を組み合わせた教育プログラムを実施し、効果を検証した。

(3) これらのプログラム実施時期および内

容等を以下に記す。

①2006年度

プログラムⅠ

実施期間：2007年1月から2月の5週間。

実施内容：06年度「日本語表現法B」の受講生に授業日の新聞(朝日新聞茨城県版・朝刊)を配布する。学生は朝刊紙全体から興味関心を持った記事一篇を選び約400字でコメントを書き次回(翌週)の授業時に提出する。指導者がコメントに添削を加えて、さらに翌週返却する。個々の学生はこの活動に計4回参加することになる。記事選択は基本的に自由とするが「番組欄」「株式欄」「スポーツ記事」等は除外とした。毎回約50人が参加し、提出された課題数は196篇であった。

②2007年度

プログラムⅡ

実施期間：2007年6月から7月の5週間。

実施内容：プログラムⅠを経験した2年生から参加者を募った。応募した学生2名を対象に以下のように準備会を含め全9回の活動を行った。

準備会 目標・ルール・日程等の確認

第1回 昨年度提出課題の検討(読解と表現)・新聞記事2件を資料として提供

第2回 前回配布資料の読み合わせ(読解)・課題：表現

第3回 提出された課題作品1次稿の検討。
検討方法は peer response 及び指導者講評による(以下同じ)

第4回 2次稿の検討

第5回 3次稿の検討

第6回 4次稿の検討

第7回 5次稿の検討

第8回 6次稿の検討

プログラムⅢ

実施期間：2007年6月から7月の3週間。

実施内容：07年度「日本語表現法A」受講生を対象とし、他はプログラムⅠに準ずる。課題作成は1人あたり3回であった。

プログラムⅣ

実施期間：2007年12月から2008年1月まで。

冬季休業を挟むため、実質4週間である。

実施内容：07年度「日本語表現法B」受講生を対象とし、他はⅠ・Ⅲに準ずる。課題作成は1人あたり2回であった。

③2008年度

プログラムⅤ

実施期間：2008年6月から7月の6週間。

実施内容：08年度「日本語表現法A」受講生

に新聞を配布し、翌週、新聞から出題する小テストを5クラス各4回計20回実施した。出題内容は漢字の読み書き、ことばの意味、慣用句、熟語、成語などとした。後日、この小テスト問題をまとめて総集編を作成した。総集編には小テスト問題の他、応用問題も新しく加え問題数は全部で150問となった。総集編は受講学生に配布し、クラスで受けた以外の小テスト問題にも取り組むことを奨励した。

プログラムVI

実施時期・回数：2008年11月に3回。

実施内容：2年及び3年を対象に「日本語テスト大会」を開催した。同年1学期に実施したプログラムVの小テスト総集編を活用して実施した。参加者は2年生7人、3年生8人、計15人であった。

プログラムVII

実施時期：2008年10月から12月にかけての6週間。

実施内容：08年度「日本語表現法B」の受講生を対象とした。新聞を配布し、全体を読むことを奨励すると同時に、読者投稿欄から一篇を選び、投稿要旨と投稿者に対する返信という形で文章を書かせた。学生1人あたりの課題作成は4回である。

④2009年度

プログラムVIII

実施時期：2009年10月の3週間。

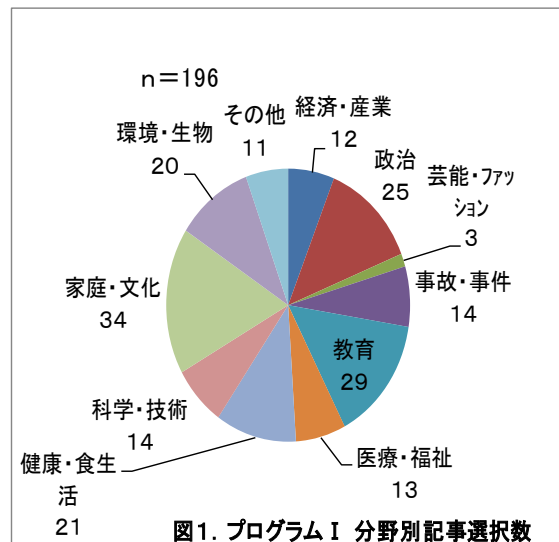
実施内容：1年生を対象として実施。「新聞を読む→考察及び調査→書く」という基本サイクルは2006-2008年度と同じであるが、「書く」領域について改善を加えた。従来はどのような記事に対しても一律に同じ字数制限で課題を作成することとしていたが、2009年度は字数制限に3パターンを設定し、学習者が対象記事の内容、情報量、興味関心の度合いを勘案して自ら字数を選択する方法を採った。

4. 研究成果

(1) 2006年度

プログラムIの活動は「読む」「対象記事の選択」「書く」「振り返り」という一連の流れから成る。当初の予想では記事選好に一定の傾向が出てくるのではないかと思われたが、実際は図1に示すようにならかなり幅広い範囲から選ばれていた。指導では新聞全体を読んでから記事を選ぶよう求めたが、事後アンケートの回答から見ると、44人中29人が「全体を読んで、多くの記事の中から選んだ」と答えており、約3分の2の学生がプログラムのねらいを理解して取り組んだことが確認できた。

4週連続の課題に「かなり重荷だった」と答えた学生と「少し重荷だった」と答えた学生は44人中合わせて26人で半数を超した。



授業外で同様のプログラムがあれば参加するかという問いには7人が「ぜひ参加したい」と答え、23人が「条件によっては参加したい」と答えた。

(2) 2007年度

プログラムIIは参加者数を限定し、活動時間を十分確保することでプログラムのレベルをIより上げることがねらいとした。任意参加のプログラムに応募してきた参加者は自己のリテラシーを高めることに対してモチベーションが高かった。しかし、目標レベルをやや高めに設定したことから、参加者と指導者の双方が納得するまで予想以上の時間を要した。当初プランではプログラム期間中に2件を仕上げることにしていたが、結果は1件に止まった。

プログラムIII・IVにおける学生の記事選好は広範囲に分散し、特定の領域に偏ることがなかったのはプログラムIの結果と同じである。プログラムI・III・IVを通じて、学生の中には新聞全体から自由に記事を選んでよいということにかえって負担感を持つ者がいることがわかった。また、適切なコメントを書くことができなかった事例の中には、指定された字数でコメントを書くのには向かない、背景の複雑な記事を選んだものがあることがわかった。前年度同様、一定数の学生が負担ではあるが取り組んで良かったと評価した。

(3) 2008年度

プログラムV・VI・VIIを実施し、漢字・漢語力の育成と語彙増強を目指したが学生の言語力が高レベルから低レベルまでかなり分散していたことから、一定の成果をあげたものの個人差の大きい結果となった。一斉指導の中ではレベル差の大きい集団に対する問題作成の在り方など、今後の課題が明らかになった。

(4) 2009年度

プログラムⅠ・Ⅲ・Ⅳの評価を踏まえ、課題の文章記述量に3パターンを用意したところ、材料とする記事情報と記述量のバランスの改善が見られ、完成度が向上した。

(5) 総括

アンケート結果などから見えてくる、学生のリテラシーに対する意識・態度は次のようなものである。

- ①学生は自らのリテラシーを高める必要性を認識し、リテラシーの向上を目指す教育プログラムに関心を持っている。
- ②個別の文章添削指導に対するニーズは高い。2年生・3年生では課外活動に対して関心を寄せながら、実際は参加するに至らない者が多い。実学系の学部で演習・実習などが多いという事情がある。

4年間に実施した8件のプログラムについては次のようにまとめられる。

- ③プログラムⅠ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅷのように「読む」と「書く」ことを合わせた活動内容は参加者にとって負担は大きい、反面達成感も得られるものである。
- ④プログラムⅡのような個人指導に近いプログラムを短期集中型で展開するのは参加者と指導者双方に負担は大きい、期間・指導頻度・レベルなどを周到に設定すれば高い効果が得られる。
- ⑤プログラムⅤのように資料から小テストを出題する方式は参加者のモチベーションに配慮しつつ出題方式・内容・レベルを決定することが望ましい。
- ⑥プログラムⅥのように参加者を募って行う単発の活動は広報のあり方が重要である。
- ⑦プログラムⅦ・Ⅷでは文章作成に方向性を与えた。その結果、資料選択と主張の方向を定めやすくなったという利点を確認された。

今後の課題としては次のようなものがある。

- ⑧リテラシー向上を目指す学生の自律的な活動への支援。
- ⑨上級学年の参加を促し、参加率を高めるための環境整備。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ①細谷美代子、初年次学生の「読み」に関する一考察、筑波技術大学テクノレポート、査読なし、17(2)、54-59、2010
<http://hdl.handle.net/10460/781>

②細谷美代子、リテラシー向上を目的とする教育プログラム開発に関する中間報告ー2006-2008年度の取り組みからー、筑波技術大学テクノレポート、査読なし、16、48-56、2009 <http://hdl.handle.net/10460/689>

③細谷美代子、論理リテラシーを高める論文表現演習、月刊国語教育研究、査読なし、431、48-53、2008

[学会発表] (計5件)

①細谷美代子、論文表現演習による論理リテラシーの育成ー授業内指導と授業外支援ー、第15回大学教育研究フォーラム、2009.3.21、京都大学吉田キャンパス

②細谷美代子、高等教育における聴覚障害学生への表現教育、国文学 言語と文芸の会2007年度大会、2007.12.2、実践女子学園

③ HOSOYA Miyoko、The Development of Teaching materials to Facilitate the Hearing Impaired Students、9th Asia-Pacific Conference of the Japanese Deaf Education Association、2006.10.9、Tokyo

6. 研究組織

(1) 研究代表者

細谷 美代子 (HOSOYA MIYOKO)

筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・教授

研究者番号：30282370